

ふんやぶ、風

第94号 (2014年3月)

風に吹かれて (72)

白井啓治

『行きはよいよい帰りはこわい』

どうぞどうぞ通りやんせ』

三月にならないと花開かなかった我が家の梅の花が二月に咲いた。現在の所に住み始めてこの二月で満十五年、その間二月に花を開いた事は一度もなかった。アルマゲドンでも起こるのかな。

東日本大震災からちょうど三年になる。この大震災から学ばなければならぬことが山ほどあったのだが、もう咽もとが過ぎてしまったのだろうかと思うことが次々と起こっている。

震災復興の在り方を見ていると、大地は人のものとの感覚でしかないような計画ばかりに思えて仕方がない。大地は人のものではなく「人は大地のもの」であることを何処かに捨てて来てしまったようである。

東京都知事選で原発即停止がもう少し争点として盛り上がってくれるかと思つたが、メディアの意図的な報道にしてやられたかと思う様な有様であった。

ビキニ環礁での原水爆実験が始まってから68年になる。1954年3月1日に行われた史上最大級の水爆(広島型原爆の一千倍の威力)ブラボーの実

験で我が国の漁船「第五福竜丸」が死の灰を浴びて23人が被爆し、半年後に無線長の久保山愛吉さんが亡くなった。実験の行われたビキニ環礁では未だに除染が終わっていない。

福島原発事故からまだ三年。実際には何も進んでいない。除染した残土の処分場もないままである。廃炉作業で出た汚染水ももう海に垂れ流すしかない程の状態である。放射性物質は50年、60年では片付かないのである。事故のなかった原発の廃炉作業だつて同じなのだ。

チェルノブイリ原発事故から28年になるが未だに収束のめどが立たない。事故を起こした原発の建屋を石棺で覆い、放射性物質の飛散を封じ込めようとしたが、その石棺もすでに老朽化が激しく、新たに百年耐用のシェルターで覆う工事が始まり2015年完成予定だという。

福島原発事故からまだ3年。百年後にもまだまだ元の状態には戻れないのだ。そうした状況を横目にして、原発を「基盤となる重要なベース電源」とする、という原案を政府がまとめたという。これなどは「人は大地のもの」という基本的な道理を無視したバベルの塔の国を志向していると言いか言いがたい。

特別秘密保護法もどきくさに紛れるように可決されてしまった。それに合わせるかのように、ま

たまた「はだしのゲン」の有害図書騒動を起こそうとする者達が現われた。新しい教科書をつくる会の神奈川支部が県議に有害図書認定を陳情したのだそうだ。私自身ライターとして飯を食って来たから言う訳ではないが、世の中に有害図書なんでものは存在しないのである。有益有害のレッテルを張ろうとする奴等こそ有害の何物でもない。

かと思えば河野談話を検証し直そうなどの動きも出ている。これなどは、何かが起こった後で「私のはあの時賛成しなかった」を免罪符にしようとする姑息な精神以外何ものでもないと言える。

韓国で起こっているヒステリックな運動に賛同する気は毛頭ないが、国として直接それをやらせたのではないにしろ、それを語って民間の行動があれば、それは矢張り後世の者としては全体責任としての謝罪はなければならぬ。

東日本大震災から3年。あの震災で亡くなった人が15884人にも上るといふ。大震災の日、私はぎっくり腰で立ち上がることも出来ず、お猫様を抱いて、古民家のような我が家は潰れ、下敷きになって終わりだなど覚悟をしたものであった。幸いこの古民家は屋根瓦一枚落ちる事なく無事生き長らえている。

今、無事元気にいられることに感謝をし、ならばこそ自分の考える事、思うことをはっきりと大声で主張することが大事な事だろうと思つている。自分を大事に考えるという事は、他人の事も同等に大事に考える事である。それを踏まえての大声の主張であれば手前勝手の姑息には決してなることはない。

進化の代償(2)

菅原茂美

前号で「進化の代償(1)」として、①睡眠時無呼吸症、②なぜ人類に「がん」が多いのか?…について記載した。

「進化」とは大変カッコよく聞こえる。直立二足歩行という大進化を遂げたのは良いが、実は、その裏で、多くの要らざることで背負い込み、今なお、そのために人類は、「椎間板ヘルニア」など、腰痛と闘いながら、生きていく。

進化の大展開により、人類は偉大な文明を築き、今日の繁栄をもたらした。しかし、進化は、決して合目的に進展するものではなく、単なる偶然の積み重ねで、「良き事も、悪しき事も、併せ同時進行するもの」であると、近年理解されるようになってきた。ダーウイン医学はそのような、進化に伴うところの医学を研究する学問である。それゆえ「進化とは変化」ぐらいに捉えるのが妥当かと私は考える。

生物の遺伝子変換は、全く偶然のなせる技で、幸も不幸も同時に背負い、生存に有利な面が、マインナス面より多く、長年にわたり、体形や機能は少しずつ転換し得た者のみが生き残った。環境の変化に対応できず、うまく遺伝子変換ができなかった生物は、みな滅亡していった。

* 人類は700万年前、直立2足歩行に踏み切つて以来、猿人↓原人↓旧人↓新人と、多段のバージョンアップを重ね、今日に至った。現在地球上のすべての人類は「新人」であり、ホモ・サピエンスただ1種のみである。「種」にも寿命のようなものがあり、最も短命だったアルディピテクス・ラミダスの10万年から、最長命だったホ

モ・エレクトスの175万年など色々ある。現在我々の「種」も、19万5千年前に誕生したが、このまま環境破壊など続けられ「奢れるもの久しからず」で、歴史が示すように、必ず滅亡の時を迎える。それゆえ、もし現在の人類から更にバージョンアップした「新種」が分化しなければ、地球上から「人類」という種は滅亡する。

人類の新種とは、例えば各国の「エゴ」で地球温暖化が進み、それに耐えるため、身長3m、体重30kg。放熱のため、頭に「トサカ」でも生えてきたなら、これは人類の新種として登録される。海面が100mほど上昇し、日本沈没どころか世界沈没をきたし、両極圏や、ヒマラヤの山中にだけ生存できる「新種」なら、お見事な進化だ。

* * *

さて人類とは、あたかも平和と愛に満ちた、ユートピアを築くため、この世に命を授けられた「神の使い」みたいに宗教界では喧伝されているが、私に言わせると「何を仰いますか」と言いたい。人類とはそんな綺麗ごとで説明できる代物ではない。純粹に生物学的に、人類の行動を見る時に、「性善説」、「性悪説」など、そんな俗説に捉われずに、その行動を冷静に観れば、「縄張り」を主張し、己の生命の持続に全てをかける姿こそ、その生き物の本性といえる。それはバクテリアから昆虫・魚類・植物・高等哺乳類全てに通じた生命の原則である。なぜならば、現在生きている全ての生き物は、そのようにして生き残った原始のただ一個の単細胞生物の子孫だからである。

* 1928年、フレミングは、青カビが、ペニシリンという物質を分泌して、同じ栄養分を奪い合う周囲の球菌などを殺すことを発見し、抗

生物質時代の幕明けとなった。全ての生き物は、喰うか食われるかの戦いで明け暮れている。

そもそも、今から40億年前、この地球上で、浅い海の底に単細胞の生物が誕生した。細胞分裂を繰り返して、仲間が増えていった。増えていくと食糧の奪い合いとなる。生き抜くためにそれぞれ環境の変化に応じ、仲間は、姿や機能を自在に変化させて「多様性」もたらした。現在、この世に生きている全ての生物はその子孫であり、いわば「同胞」である。にもかかわらず、原始生命は、とにかく自分が生きるために、周囲の栄養になりそうなものは何でも取り入れ、細胞分裂した仲間さえもエサにし、カスは捨てた。原始生命だけではなく、後に進化した全ての生き物は、この原則から逃れることはできない。悲しいかな「共食い」現象である。

大きな「眼」で見れば、この現象は、これまでの人類史のどの時代にも見られ、大は国家間の「戦争」、小は隣近所の小競り合い、職場のパワハラなど、全てこの概念に相当する。権力闘争・序列闘争など戦いの連続である。動物界の縄張り争い・植物の枝や根を張って一定空間を占拠する基本姿勢。これらは全て他を生贄にし、まず自分だけが生き残ろうとするドーキンス博士の言う「利己的な遺伝子」の根本姿勢である。全ての生き物の遺伝子は、己のコピーを増やすことに専念し、生き物はその遺伝子の安全継続のため、盲目的に操縦されている。人は、どんなに偉そうなことを言っても、基本的にはこれら遺伝子に操られている「道化師」のようなもの。

(去年「ことば座」の東京公演で、人の世の権力闘争をあざ笑うヨネヤマママコ女史演ずる「道

化師」のしぐさが、私の人生観とぴったりだったので、大いに感動を受けた。)。

現在世界のアチコチで起きている「いがみ合い」の全ては、原始生命の生存原理に盲目的に従っている、哀れ悲しき忠実な信奉者ども……とも言える。

現今の領土侵略など「人」の風上にもおけない、卑しき輩と軽蔑したくなるが、博愛主義を唱える聖人君子とあまり変わらない。(宗教界の勢力拡大競争など、あの醜い対立はヤクザのそれとなら変わらない)。日本もかつてはそうであったし、現在、近隣諸国がスタタモンダをやっているが、悲しき「人間の性(さが)」といえる。同じ大乘仏教の流れを汲みながら、他国の孤島をせぶり盗ろうとする卑しい心根には、ほとほと愛想が尽きる。

そういった意味では、人類は、いかに大脳を膨らましたとはいえ、生存競争に明け暮れる野生の「獣(けもの)」となら変わらない。特に私は、生命現象を細胞レベル&分子生物学的にものを考えるから、人間と他の動植物とに大きな違いを見出すことができない。人類は崇高な面もあるが、眼をそむけたくなるような残忍性も多々ある。権力闘争・序列闘争など、バクテリアや野獣となら変わらない。人類は今後、何世紀、代を重ねようが、宇宙に進出しようが、「縄張り」主張の大原則は、変わることはないだろう。

・・* 　いずこかの惑星に、地球とは全く異なる「進化」を遂げた知的生物がいれば、教えを請いに飛んで行きたい心境だ。私は、あと10歳若かったら、そんなSF小説を本気で書きたい衝動に駆られる。前置きが長くなった。さて本論。

③脳の巨大化が「がん」を引き起こす

人類の♀は、進化の過程で、発情期の表現を消した為、♂はいつでも交尾可能となった。すると♂は、随時精子を供給する為に、常時細胞分裂を促し、過剰に増えた細胞は本来除去されるシステムを排除して、精子を異常増産する「型」を獲得した。すると細胞分裂を抑制する遺伝子が機能しないがん細胞は、このシステムをチャッカリ借用して、無尽蔵に細胞分裂をするようになった。他の動物に比べ、季節性がなく、セックスの回数が多い人類は、がん多発という、とんでもないリスクを背負い込んでしまった。前月号でこのことに触れたが、これと同じようなことが、進化医学では、何と「大脳の巨大化」が、同じく「がん」を引き起こす要因になっているという。

人類は700万年前にチンパンジーの共通祖先(脳容積400cc)から分岐して、直立2足歩行を始め、以降250万年間の「猿人時代」には、わずかに脳容積は50ccしか増加していない。しかし、それからほぼ400万年間の「原人時代」に、石器の発明・改良や言語の発達などにより、一気に550ccも脳容積を増やし、1000ccにも達した。そして原人時代の末期から旧人時代・新人時代のわずか50万年間に400ccも増え、現在1400ccの巨大な脳を獲得した。そしてその巨大な脳が、加速度的に今日の文明を発展させた。

・・* 　最後の原人ホモ・エレクトスから、ほぼ30万年前に分岐したネアンデルタール人は、同じ親から分岐した後輩の我らホモ・サピエンスより、脳容積は100ccも多かったが、なにが原因か分からないが、今から2万年ほど前に突然この世から消えてしまった。我らホモ・サピエンスとの混血も行われたようなので、生存競争に敗れた…と

ばかりは言えないようである。もしかしたら「種の寿命」などというものがあるのかも知れない。

さて人類は、脳容積を増大させたことにより、偉大な文明は発展したが、反作用的に「がん」のリスクも急拡大した。それは脳の容積を發展させた遺伝子が「がん」になりやすい条件を生み出してしまったからである。それはFSA(脂肪酸合成酵素という「細胞膜」の原料となったり、脂肪をエネルギーとして蓄積するのに使われる酵素である。FASは脂肪組織、肝臓、そして脳で盛んに活用されている。なぜ脳で?…と疑問に思われるかもしれないが、脳は神経細胞の塊のようなもので、神経細胞同士を電気信号で繋いで「知覚」などを生み出している。細胞同士を繋ぐのは「軸索(じくさく)」であり、「髄鞘(ずいしょう)」という膜で覆われている。髄鞘は、絶縁体様の働きがあり、信号の混線を防いでいる。FASはその髄鞘を作る必須の酵素である。問題は、がん細胞がこのFASを積極的に活用して、がん細胞の膜を作るためにFASを盛んに利用している事だ。更に、FASにより作られたがん細胞の膜は、前号でも触れたアポトーシス(過剰に増えた細胞に対しての自殺命令を撥ね退ける能力も存在する。恐るべきがん細胞の巧妙な生き残り戦術。人類の長い歴史の中で、遺伝子変換を起こし、生存に有利に変換した機能を、がん細胞はチャッカリ利用している。

人の命をいつも狙っている外患の微生物と、内憂のがん細胞は、正に厄病神だ。もしかして、これらは、人類という個体数を無限に増やさないための自然の摂理としたら、あまりにも厳しすぎる掟というほかない。

地球を一つの生命体と考えたなら、人類は文明

を異常に発展させ、自然を破壊し、異常繁殖し、バランスを崩す寄生虫のようなもの。それゆえ、「がん」は、ポピュレーションのバランスを維持し、正規に戻す為に神が与えた強烈な「鉄鎧」なのかもしれない。あるいは、文明が進歩したとは言いが、有害化学物質など大量生産する「ならずもの」の人類に対し、『調子込むんじゃないよ…』との神様の警告なのかも知れない。

* * *

④グレートジャーニーが「がん」を招く

アフリカで誕生した人類は、今からほぼ7万年前、生まれ故郷のアフリカを飛び出し、世界各地に拡散した。ヒマラヤ山脈の北周りで、中央アジアに進出したグループの一部は、更にシベリアまで進み、1万5千年前、氷河期で海面が今より90%も低かったので、ベーリング海峡を渡り、北米へと進み、更に瞬く間に南米チリの先端まで歩を進めた。一方ヒマラヤ山脈の南周りで進出したグループの一部は、インドネシアの島々が大陸と陸続き（スンダランド）だったのでオーストラリアまで足を延ばす事ができた。

更に南周りの一部は東南アジアへと進出し、今の日本列島へは「南方系縄文人」として定着し、極東から樺太を経た「北方系縄文人」と共に、日本列島には凡そ10万人の縄文人が生息し、平和な生活を送っていた。所がアジア大陸の戦争難民である弥生人が今から2900年前頃から、短期間に100万人も一気に押し寄せてきて縄文人と混血し、日本人の基礎となった。

出アフリカ後、世界各地に歩を進めた偉大なる人類の旅路を「グレートジャーニー」と呼ぶ。私も人類の祖先の偉大なる勇氣ある旅路を称賛して、

2012年6月「遙かなる旅路」と題し、一冊の本にまとめ発行した。（ところが13年5月、英国のバーミンガム大教授アリス・ロバーツ医師が、私と全く同じ題名・同じ内容で、500ページの大作を発表・和訳刊行された。こんな偶然もあるものかと真に驚かされた。）

人類が誕生したアフリカは、赤道直下で紫外線が非常に強い。有害紫外線は細胞のDNAを破壊する。生命誕生以来、単細胞から多細胞に進化しても30億年間、生物は海から外に出れば、紫外線によるDNA破壊のため上陸できなかった。所が海中植物は、日光と炭酸ガスと水から炭水化物を作り、余った酸素を吐き出した。その酸素原子が3個くっついたものが「オゾン」である。海中植物が30億年間放出し続けた酸素がオゾン層となり、有害紫外線を吸収してくれる。そのおかげで長年海中に留まっていた生物は、一気に上陸が可能になった。（生物に最も重要なオゾン層を今、愚かな人類は、フロンガスなどで破壊している。）

我々脊椎動物も、魚類から両生類に進化し、鰓を肺に、鰭（ひれ）を足に進化させ上陸を果たした。

さて、人類と親戚にあたるチンパンジーは、同じ赤道直下に生まれながら、皮膚の色は白い。黒く厚い体毛が、有害紫外線（UV・A）を防いでいる。ところが人類は、進化の過程で突然体毛を失った。そのため皮膚細胞がメラニン色素を生産して紫外線を防御する事となった。そしてアフリカを出た黒人は、現在でも緯度の高い所に住めば、ビタミンDを作る有用な紫外線（UV・B）を濃厚なメラニン色素がシャットアウトする為に、くる病・骨軟症・骨粗鬆症・手足のしびれやけいれんなどを引き起こす。有害紫外線から身を守るため

にメラニン色素細胞を発達させた人類は、高緯度にまで進出したために、有用な紫外線を吸収できず、ビタミンD不足を招き、幾多の病を背負う事になった。あちらを立てればこちらが立たず。

ビタミンDは、腸からのカルシウム吸収を高め、更に免疫システムを強化し、がん発生率を下させている。事実、米国では北部の州は南部の州に比べ、大腸がん・乳がん・膀胱がん・前立腺癌などの発生率が2〜3倍も高い。大腸がんは、動物性脂肪食が多いと発生率が高くなるが、南部は北部より動物性脂肪食が多い。逆に北部は大腸がんになりにくい野菜食が南部より多いが、大腸がんの発生率が高い。このことは、北部はいかに、免疫強化のビタミンDが少ないかを意味する。

さて逆に、アフリカを出て世界各地に進出したホモ・サピエンス（すべて黒人）は、緯度の高い所に移住すると、長い年月をかけメラニン色素は減少し、白人化していった。中間緯度地帯に定着したのが我々黄色人種である。緯度の高いところは、有害紫外線が少ないため、自然とメラニン色素が不要になった。そして、カナダや北欧などにまで白人は進出したが、太陽からの有用な紫外線は薄く、ビタミンD不足をきたし、骨軟症や骨粗鬆症のリスクを背負う事になった。

人類に必要なビタミンは13種類あるが、殆どは食物から取り入れるものである。しかし唯一ビタミンDだけは有用な紫外線の助けにより、体内で製造出来る。ところがその有用な紫外線は、緯度が高くなると、非常に薄くなり、骨軟症などが起きやすい。

更に会社など室内生活や、美容のため日傘や、日焼け止めクリームを多用し、衣類で肌を露出し

ないなどで、益々ビタミンD不足↓骨粗鬆症多発。免疫力低下のため、がん多発をきたし、日本では医療行政に多大の国家財政を注ぎ込んでいる。国は治療費補助ではなく、日光にあたり運動するなど、予防医学に予算を重点配備すべきである。

* カナダ北部に住むイヌイットは、黄色人種である。移住してからの時間がわずか一万年そこそこなので、まだメラニン色素製造細胞が減少していない。しかし彼等は、緯度の高い所に住んでいるにもかかわらず、ビタミンD不足による骨軟症など見られない。理由は鯨類など動物の生肉や内臓から存分にビタミンDが得られるからである。しかし、世の中は皮肉なもの。シーシェパードのように、海生哺乳類の捕獲を善しとせず、嫌がらせなどする輩もあり、イヌイットは最近、鯨など海生哺乳類の捕獲が減少し、ビタミンD不足が見られるようになったとの事である。

(余分な事だが、日本の幕末期、アメリカの捕鯨船が日本近海で500艘も操業し、鯨を取り放題。ペリーが浦賀に来て開港を迫ったのは、何のことはない、捕鯨船に新鮮な野菜や水が欲しかっただけの事。クジラを絶滅危惧種に追いやつた元々の原因は、アメリカ捕鯨船団の乱獲と言われる。今、日本の調査捕鯨に対する妨害は論外だ。)

また、17、18世紀、オーストラリアに白人が移住したら、太陽光が強いのにメラニン色素が少ないため、皮膚がんが大量発生している。オーストラリア白人は、毎年発生するがんの80%は皮膚がんである。一生のうち三人に二人は皮膚がんになるという。(オーストラリア原住民のアボリジニは優れた頭脳を持つ。狩猟用ブーメランは、もし標的に命中しなければ手元に返ってくるという世界

に類を見ない飛び道具である。そのアボリジニをオーストラリア政府は局地に押し込め、1967年まで市民権を与えなかった。南北アメリカ大陸で西洋の侵略者共は、9千万人の原住民の9割を殺害した。いずこの侵略も、極悪非道である。)

【本稿の結論】

アフリカで誕生した人類は、人口増加により、多分食糧不足から、出アフリカを敢行。アラビア半島から北西方向に進出したグループは、緯度が高くなるにつれ、メラニン色素が減少して白人となったが、日射不足からビタミンD不足をきたし、骨軟症など多発。更にビタミンDの免疫力強化作用が薄れて、がんになりやすくなった。その他、中緯度地帯に進出したグループも文明の発展などにより、ビタミンDが不足がちになり、骨粗鬆症など多発。進化を重ねても、自然の摂理には勝てず、多くのリスクを背負い込んでしまった。

対策は、生活改善あるのみ。日中わずか30分でもいいから、外に出て紫外線を浴び、散歩など運動する事。日射による皮膚がんの心配よりも、外に出ずビタミンD不足による骨粗鬆症や免疫力低下によるがん多発防止が重要である。国も予防医学の推進に全力投球すべし。

霞ヶ浦水運(一)

木村 進

この記事は三年程まえから調べたことや思いついたことなどをブログに書き綴ってきた内容から「霞ヶ浦水運」というくくりで内容を抜粋してまとめたものです。

明治28年に友部〜土浦間に鉄道が開通し、翌明治29年12月に東京田端(開通当時は上野ではなく田端であった)まで今の常磐線が開通した。

鉄道が開通する前までは、ここ常陸の国から江戸(東京)までの荷の運搬も人の行き来も陸上よりも、霞ヶ浦を経由した舟による水運の方が便利であった。特に物資の輸送は荷馬車などで運ぶよりもコストがかからず、ほとんどがこの水上交通によるものが多かった。

この当時の物流の流れを知らないと、今の国道や、鉄道の状況でしかものが見えなくなってしまう。私も、この石岡の地に住むようになってから霞ヶ浦の周辺の地を見て回る機会が多くなり湖周辺の人々の生活の中に霞ヶ浦水運が発達していた頃の香り、趣、遺産、今に続く祭り、文化などがたくさん残っていることに気がついた。しかし、私の思考回路が今の交通網を前提に過去を想像しようとして矛盾する事柄に出くわしては愕然とするところが良くあった。要するに、この水上輸送の状況を想像すらできないという思考停止状況に陥っていたのである。

歴史への興味は身近なものが過去と綿々とながっていることがわかって初めて興味を覚えるもので、学校教育が歴史をただ単なる暗記科目にしてしまったために(少なくとも私には苦手な暗記科目という意識、私のような歴史を知識と捉えることしかできない音痴な人間ができあがり、定年を過ぎて仕事人間から解放された今頃になってやっと、歴史の面白さや、昔から続いている芸能・文化・暮らしなどに興味をわき、本を読んだりネットで調べたり、各地をまわってそこに吹く風の感触や香りを

楽しんでいるのである。というわけでこの霞ヶ浦水運についてわかったことを数回に分けて述べさせていただきますと思う。

さて、この水運を調べたいと持ったのは、石岡市高浜の街を調べているうちに、江戸時代から明治にかけてこの地で発達したという霞ヶ浦の水運について、ほとんど知識がないことがわかったことがきっかけであった。

もともと暴れ川と言われた利根川の流れを家康が命じて(1603年)今の東京(江戸)湾から銚子の方に東遷したことすら昔は知らなかった。

学生時代に習っていたのかどうかとも記憶にないのである。こんな調子であるから、昔の船が何処を通っていたかなど知る由もなかった。江戸時代も荷物だつて水戸街道(陸前浜街道)を運んでいたと思ひ込んでいた。でもこれでは多くの荷物は運べない。そのため霞ヶ浦水運が発達して、そこに人や荷物が集まり町が栄え、いくつもの文化が生まれていたのである。

江戸時代に船で物資を運ぶルートはいくつかあった。まず日本海側は北前船が若狭湾から対馬海流のつて北海道まで物資の運搬をしていたのであるが、太平洋側の東北方面や関東から江戸までのルートは一体どうなっていたのだろうか？

太平洋側は親潮と黒潮が銚子沖でぶつかる。この2つの海流反対方向からぶつかる、本土から遠ざかるように東に流れていく。

このため、昔の人は黒潮に乗ってやってきてもここから北に回りこむことが困難で総の国に上陸した。千葉県の東部を安房国という所以であろう。こちらの話はまた別な機会に譲るとして、江戸時代に北からの物資を外洋を経由して江戸に運ぶに

はこの流れが大きな障害であったに違いない。

このため北からの物資や人の往来にこの霞ヶ浦が大きな役目を担っていたことになる。

まずは霞ヶ浦を経由して江戸までの水運ルートを述べて見たい。

一、高浜ルート

霞ヶ浦の西側は土浦入りと高浜入りの二つの入り江に分かれている。別れる場所(かずみがうら市出島の沖合い)を三又沖といい常陸国分寺のつり鐘の一つが盗まれ沈んだと言ひ伝えられる場所である。これも昔から波が渦巻いている難所で船着場としてはこの2つの入り江の先である土浦と高浜の湊が適しており、昔からここに舟が集結し問屋も集まることになった。土浦の港についてはここでは触れず、高浜について見て行きます。

常陸国風土記にも書かれたように昔からこの浜は人々が集まっていたようです。「高浜」の名前も国府(この)の浜が転じて高浜となったと考えられ、江戸時代には常陸国府(現石岡)と江戸や水戸などと物資を運搬する港町として栄えました。八郷地区などからの物資運搬はもちろん馬もありました。が柿岡にも恋瀬川岸に舟の発着場もあり川を下って高浜に荷物が集められました。ではこの高浜の町は江戸時代や明治半ば頃までどのような姿だったのでしょうか。

それについては「高浜神社」に慶応4年3月(天政奉還の翌年で戊辰戦争が始まった年)に奉納された額絵があります。これは「石岡の歴史」にもカラー写真で紹介されています。ここに書かれた絵には筑波山と高浜神社が描かれ、湖の岸辺にも今はない

小さな鳥居もあります。また、屋号の書かれた帆を張った舟や帆をおろしてマストのついた舟が数隻見えます。また町の真ん中に大きな醤油工場の煙突のようなものも描かれています。舟の横幅は結構広く、2m以上あるように見えます。全部で10隻以上の舟が描かれています。当時の賑やかな様子がよくわかります。

もう一つ当時のこの船運でどの様なものが運搬されていたのかを知る看板が「高浜公民館」(いづみ荘近く)横に掲載されています。

これによると、江戸に運んだものは「米・麦・大豆・小豆・薪炭・醤油・木材など」で江戸から運ばれたものは「塩・干鰯・砂糖・ロウソク、呉服・荒物・小間物など」と書かれています。江戸時代の初めにすでに府中領の年貢米を江戸に船で運んでいた記録があり、江戸中期以降になると河岸問屋の数も増えてきました。

この年貢米は「府中松平藩」、「笠間藩牧野家」や旗本などのお米で、薪炭は主に恋瀬川の流域から運ばれてきたものです。また、荷揚げされた塩は「赤穂塩」が主で醤油の原料として非常に貴重で量も多かつたようです。ただ、塩は赤穂に代わってこの霞ヶ浦水運とも大きく関係していた千葉県「行徳」の塩が江戸の町に供給されていたのでこのあたりの塩も入ってきていたのかもしれない。「干鰯(イワシ)」は九十九里のもので、江戸からは衣類、日常品などが多かつたようです。

さて、高浜に集められた物資はどのルートを通つてどの様に江戸まで運ばれたのでしょうか。神社の奉納額絵に描かれている船は「高瀬舟」です。高瀬舟というのは元々浅瀬でも舟底が川底にぶつからないように船底を平らにした小型の木造船の

ことで、浅瀬が高瀬になったとも言われています。もちろん森鷗外の小説「高瀬舟」に描かれています。この鷗外が書いた高瀬舟は京都から大阪へ流れる高瀬川を行き来する小舟がモデルであり、罪人の運搬にも使われた小舟です。しかしこの霞ヶ浦を航行していた高瀬舟はもう少し大きかったようです。

この舟の規模について「いしおか百物語」に書かれましたので紹介しましょう。

「高瀬船」

・霞ヶ浦 900～1200 俵 (利根川下流域まで…1船に船頭と水主5～6人。北浦も含む)

・中利根川 300～530 俵

・鬼怒川 250～500 俵

・那珂川 500～600 俵

「平田船」 300～500 俵

「茶船」 60～100 俵

「川下小船」 25 俵

馬の背に米俵を両側につけても人足が一人必要です。舟なら数十俵から数百俵一度に運べます。

また、明治期には外輪蒸気船が就航します。まさに人と荷物を運ぶ足として、霞ヶ浦周辺の町を結ぶ航路として運行されていたのです。

この外輪蒸気船「通運丸」の煙突から煙を吐きながら霞ヶ浦を行ったり来たりしていた様子が目に浮かぶようです。この通運丸の航路は霞ヶ浦沿岸の各都市を結ぶ役目も持っており、かなり細かく船着場が設けられたようです。高浜・小川・羽生・玉造・柏崎(対岸)・田伏(対岸)・井上・五町田・今宿・麻生・牛堀……。

この蒸気船は戦前まで運行されていたようです

ので、年配の方は実際に見ておられる人もおられると思います。

さて、霞ヶ浦で航行していた高瀬舟などは潮の流れがあまりないので、風があれば帆をはり、なければ櫓をこぎ。また川を遡る時などは、川の沿岸からロープで曳き舟などもあり、これに係る人々も集まり川岸や湊の町が繁栄していったのでしよう。

この高浜から江戸までの水運ルートなどについては次回に書きたいと思います。

筑波海軍航空隊記念館

小林幸枝

記録的な大雪に二度も見舞われ、厳しい寒さも続き、今年位春が待ち遠しく思う事はありません。特にインフルエンザでダウンしたこともあり、二月はまともにも外にも出なかつた気がします。

さて、去年十二月二十日に、映画「永遠の0」のロケがきっかけとなり笠間市にある県立こころの医療センター内に5月6日までの期間限定で筑波海軍航空隊記念館が開設されました。

筑波海軍航空隊は、旧日本海軍の部隊の一つで、戦闘機専修搭乗員の教育を推進するため、戦闘機に搭乗するまでの実機練習を推進しました。しかし、絶対国防圏策定後の昭和十九年以降は防空実施部隊となりました。そして、末期には特別攻撃隊を編成し、沖縄方面の特攻作戦に従事したのでした。

茨城県笠間市には、旧海軍航空隊史跡、司令部庁舎・滑走路・地下戦闘指揮所等々日本最大規模

のスケールで残されています。

記念館で展示品や写真などを見て回りながら、悲しかったことは、婚約の記念写真を撮った男性が戦争に発ち、戦死。家族からは別の男性と結婚することを言われたが、婚約者であった男性の遺影を持って死ぬまで独身を通したという話でした。とても残酷な時代だったのでね。

この記念館は五月の六日までですので是非お出かけいただき、戦争というものの悲惨さを改めて考えて頂ければと思います。

楽しさあり悔しさあり

伊東弓子

冬籠りに入りたい気持ちの晩秋だった。陽が短くなり、寒さが加わり動きも鈍くなった私、落ち葉の中に埋もれてしまいたい程だった。夫の一周忌のことで頑張ろうと思いなおし元氣を出した。人一人いなくなつてもう会話することも出来なくなつた。毎日語りかけても答えはない。一方通行で空しいが自然と声かけをしないではいられない。いや声をかけたいのだ。

暦が二枚目になると、気分的に明るくなつた。節分の日には暖かく雷電の森に豆播く人々の声が響いて春の間近いことを感じた。

所がその週には雪が、そして数日後大雪となつた。家の前の道路はいつものことながら、動けなくなつた車が二～三台あり、知らない人との会話があり、手伝う楽しさがあった。

そんな寒さの中でも、晴間のある日は外へ出たくなる。ペダルを踏んでもまだまだ土は堅い。大

半の畑には作物のない風景が続く。ふうっと子供頃の畑の様子が浮かんだ。緑の麦の列が長く続き、麦踏み人の影も多く、通った人との話にも足は休めず動かし続けていた情景、遠い日の故郷の人達だった。散歩している人に合った。知っている人だったし、暫くぶりだったので歩きながら話をした。

「暖かい日を見つけて歩いてる始末ですよ」

「そうですね。今年は特に感じますよ。外に出るのが億劫で、用事も遅れぎみです」

四方山の話をしながらひとつきり行くと十字路だ。

「お互いに自分を大切にしましょう」

と右の肩をポンと叩いて言ってくれた。

「またお合しましょう」

と、市街道を右と左に分かれて行った。肩から体中に暖かさが流れるのを感じ、一人顔が綻んでいる自分がいた。

そんな思いの後、この一年に体験したことは今迄味わったことのない言葉のキャッチボールだった。楽しさと悔しさ、喜びと悲しさ、それらは孫とのやり取りの私の姿の凄まじさであった。私達夫婦は、子供が早々と巣立って行って長いこと二人暮らしの気ままな生活をして来たからだろう「家族」という中で、コミュニケーションが上手くとることが出来ないような気がする。小学生の子との接し方が難しかったようだ。外にいる孫達とは当りまえに接してきた積りだったが、毎日一緒にいることは遠慮がない、所有物と考えているのか、自分と同等の扱いをしているのか私自身に冷静さがなくなっていたのだろうか反省はしてもすぐ忘れてしまい事を起こしていた。

春先、一緒の生活が始まった二人の孫、韓国から日本の生活に戸惑うことなく入っていった。弟の方は辿り着いた日本語だったのに学校生活一週間が過ぎる頃には姉とも対等に話していた。覚えの早いのに婆さんとしては喜びと驚きで一杯だったが、言い合いにも参加し始めることが大きくなり、新たな葛藤が増えた。

夏休みの宿題の仕上げをしていた二人の近くで私は原稿書きをしていた時だった。二人とも習字だったが、弟は慣れていない様子が分かる。姉はすらすらとこれ見よがしに書いている。弟が、

「お婆ちゃん。字が太くなつたよ」

「ああ墨が少し多かつたから染みたんだね」

「しみるってなあーに」

「染みるって、染むことだよ」

「にじむってなあーに」

「滲むって、染みること」

その後、何回も繰り返しその場句いつまでも続いた。私も興奮してきて声が大きくなっていく中に口も大口になったせいかわ、入れ歯が外れそうになった。慌てて口を塞いで「べろ噛んじゃった」と誤魔化したのが、傍にいた姉は見逃さなかった。早速手紙をくれた。

（婆が舌べろかんだら、本当に面白い。晴れない婆ちゃんのこと）

というものだった。危ない危ない。きれずにすんだ。少し冷静になつてから「染みる」「滲む」の意味が分からなかったのかな。でもヘラヘラ笑いながら言っていたのは私をからかっていたようにも思える。私の心は穏やかでない仮幕締めになつた。

秋には会話の内容も広く深くなつていくのを感じ、いろいろのこと教えてやりたいという気持ちの思い上がりで煩わしかったのか。ある時大喧嘩となった。

「小学生のはらがたつまごから

.....

年上しかくゼロの人へ」

という手紙が机の上に置いてあるのに夜気がついた。内容を読んでいると腹が立つて昼間のことを蒸し返すことになった。この悔しい気持ち、誰かに聞いてほしいと憤っていたが、自分が笑われるのが関の山、一晩経って明日又考えようと自分を宥めた。翌日読み返しても腹も立たずすつきりしていた。ああよかつたという気分のところへ孫が「おはよう」とやってきました。夕べのあの私の姿は何だったのだろうか。

冬には夕方の一時、三人で韓国ドラマの「呪文」を見た。朝鮮半島の広大な大地で古朝鮮から高句麗へと歴史が築かれていく感動を共有した後、韓国への三人の珍道中が始まった。

忠州の山も町も中国からの汚染物質の為、不透明の霧の中にあつた。晴れあがる日は少なかった。寒さよりそのことの方が不安で室内での生活が多かった。娘の家族六人と私達三人で九人、日本語の出来るのは四人、韓国語が出来るのは八人、両方できるのは三人という割合だ。小学生四人は活発で部屋中心の生活では限界があつたし、韓国は春休みという時期、四人の喜びは騒ぎとなつて頭以上に鶏冠にくることも多かつた。日本語の出来ない子供達の前で叱り狂つても仕方がないと、その場に居た堪れなく町を散策したこともある。又三人の日本語会話の勢いに娘が癩癩を起こしたこともあつた。

両方の言葉の出来る二人が、日本語の出来ない子四人と韓国語の出来ない私の仲介をして、気づかってくれる嬉しいことも沢山あった。鉢にアロエと同じような葉が沢山生えている、というより挿してあるみたいなので「ねっこ」はあるのか弟に聞いてくるように頼むと、まず姉に「ねっこ」のことを聞いてその後娘の長男に聞きに行った。長男は私を鉢のところへ連れて行って「婆ちゃん、ないよ」と葉を引つ張つて見せてくれた。挿してあったのだった。この三人のやりとりで私に伝えてくれるこの姿がとても嬉しかった。

お産の手伝いは有難いものだといつも思っていたが、今回もそうだった。大切な時間を貰った事で、普段出来ない話しがゆつくり出来た。姉兄妹への思い、友の状況、お互いの国のこと、現代生活から出てくる問題、老いていく世代（姑）の違い、子育てのことと尽きない楽しい会話だった。帰る前の晩は子供どうしの心の状態も複雑だったのだろう。いつも楽しいお弾き遊びも「狡いこととした」ということから言い合いになり、私が口を出したことで余計に拗れてしまった。

「日本語の出来る私には厳しくて、出来ない大秀東和には優しいんだから、私も日本語出来ない方がよかった。もう日本語喋らないからね」

「子供のことに口出ししないでよ」
と手厳しかった。逆撫でしないように聞くだけにした。事実日本語の出来ない二人には不便さも加えて少し甘かった私だったから。

兄の方が七色の輪ゴムで作った首飾りを掛けてくれた。妹の方は女の子の絵を描いてくれた。言葉で表現できない子供なりの言葉を貰った。

二週間の生活の中で継ぎはぎだらけの日本語と

ジェスチャーで、言葉の役目は果たせなくても心の一部は通じたのだろうと自己満足して別れることになった。別れはやはり辛かった。帰りのバスから成田に着く迄、姉と弟の二人は婆さんを心配して日本語で話してくれていた。

洗濯物を干す目に白梅が見えた春だ。三世代で一緒に暮らした幸せは何ものにも変えられないと思う。子供からも力を沢山貰った。これからもやり合つて、悲しんで喜んで笑い合つていきたい。

第八回いしおか雛巡り

兼平智恵子

『ただいま』『おかえりなさい』そう答えてくれる歳を重ねた母や父。：（いしおか雛巡りパンフレットより）

なつかしさと温もりと優しさに包まれた第八回いしおか雛巡りが今年も石岡市中心市街地商店街に於いて二月十五日～三月三日まで九十軒の参加店で開催されました。

恒例になりました石岡市まちかど情報センターでの歴史絵巻方式の雛飾りの今年の主役は平安末期から鎌倉時代初期の平家方の武将、平景清（たいらのかげきよ）でした。景清は桓武天皇の血を引く高望王の子孫で、平氏のルーツの地であるここ、常陸国石岡には「景清塚」や「景清の井戸（府中六井の一つ室ヶ井）」、そして「景清屋敷」の伝説が語り継がれています。

景清は体が大きく力が強かったので悪七兵衛景清とも称されていました。「悪」とは悪人という意味でなく性格や行動が激しく、勇猛であり、剛毅

であるを意味するもので、現在の石岡市貝地にあります貝地町公民館の隣地の塚が、景清塚と言われ、頂上に愛宕神社と平景清公之霊地の碑があります。

愛宕神社を管轄なさっている金刀比羅神社の宮司さんが「愛宕神社をもって勇敢な景清の霊を慰めている」と話されていました。

又、府中六井の一つ室ヶ井（六号国道沿い、お仏壇のまつやの前、善隣幼稚園へ向かう道路側の角辺りにあったといわれている）の水で景清は産湯をつかったと言われている。この地、一帯が景清屋敷と呼ばれているそうです。景清塚を後ろにしている平等寺を尋ねましたところ、住職様は当寺では悪七兵衛景清供養塔をたて守護神とされているとの、ご丁寧に供養塔を案内して下さいました

景清は寿永二年（一一八三）、平維盛に従つて屋島の戦いで源氏的美尾谷十郎国俊の鍛（しころ）を素手で引きちぎったという「鍛引き」が特に有名ですが、壇の浦の戦いで敗れ、平家滅亡後、源頼朝に従い、後に常陸国守護八田知家に預けられましたが、食を絶ち建久七年（一一九六）三月七日命を絶えたと言われています。また降人（こうにん）後、滅亡した平家の鎮魂のために、常陸国で法師になったともいわれている。このように生涯に謎の多い人であり様々な伝説が残され、歌舞伎や能などの創作に主人公として取り上げられています。

さて、まちかど情報センター内ではひなさま達の歌舞伎十八番「景清」が演じられようとしています。

今宵は大入り満員御礼、升席に陣取るひなさま達。平家滅亡後捕えられの身となった景清ひなさまが鎌倉問注所にある土牢に押し込められ、平家

重宝の行方を尋ねられるが、景清は相手にしない。そこで景清の妻と娘、さらに平敦盛の子をも引き出し脅す、そのうち、娘を責めようとするのでついに景清は怒りを爆発させ大暴れし、牢を破ろうとする。

隣の舞台は壇の浦の戦いという戦場、そして第三の舞台はなんとソチオリピックの会場、ひなさまがジャンプをしている。ひなさま達の大活躍の公演でした。

常陸国石岡に景清塚や産湯をつかったという室ヶ井など景清がこの地に確かに生きたことを偲ぶ場所が残されていることに、歴史を再確認できなかったことに感謝いたします。職員の方々の発想力に感激し、飾り付けのご苦労、お疲れ様でございました。見学の皆さんの心にも石岡の歴史の深さに心うったことでしょうか。

昨年に引き続き、まちかど情報センター主催のルネッサンス、講師長谷川功先生によります石岡の歴史巡りは常府石岡ゆかりの人物の足跡を尋ねると題して、二月十六日と三月一日の二回行われました。

日本武尊の腰掛、常陸国の国司であった藤原宇合、常陸国府を焼き尽くしてしまった平将門、初代常陸大掾職についた平国香、都々逸の創始者である都々一坊扇歌、正岡子規の宿泊先、手塚治虫のご先祖の墓、等々長谷川先生の豊かな知識から溢れでるエピソードを交えての楽しい実のある歴史巡りでした。

そして今回は石岡市特別写真展「看板建築と石岡の町並み」が元近清書店跡にて開かれました。今年一月に全国的に放映された石岡の登録文化財の紹介があり、その見学を兼ねての雛巡りの皆さん

にとつては、大正、昭和の初めの活気ある人々やプラタナスの街路樹、モダンな建物、あらたな石岡の魅力を感じて頂けたと思います。

石岡は明治、大正、昭和と、商業・醸造・製糸業などの産業都市として成長していきました。現在にはどんな産業か。石岡に住む皆様は石岡の歴史に関心をよせ先人達の遺業を肌で感じ、皆さんの英知の結集で歴史を中心とした観光産業であると思う、今年の雛巡りでした。

・おひさまにさとされ梅一輪 智恵子

【風の談話室】

二月は、一週にわたって大雪が降り、我が家の庭にも30センチ以上の積雪を見た。例年になく速い春を迎えるのかなと思っていたのであるが、結局は一日、二日早また程度の例年通りの梅の開花となった。

隣家の陰で、育ちの遅い露の臺も今年はどうしたわけか早々とほっこりと膨らんだのであったが、摘もつと思つた時に二度の大雪で、一週間以上も遅れての露味嚙を褒める事となった。是もまた例年通りである。

しかし、三月の気象予想をみると、三月は例年になく寒さが続くそうである。まだ一度一度は雪が降るのかも知れない。

雪国育ちで、子供の頃は雪かきに慣れてはいたが、この歳になつての雪かきもつこい勤弁願いたい。

《ことば座だより》

今年度の予定がほぼ固まつてきた 白井啓治

ことば座の今年度最初の公演は五月十八日と決まった。これはことば座の公演ではなく、小林幸枝が北海道札幌の仲間と呼ばれての客演となる。

昨年十月に東京公演を行った時に衣装を担当して頂いた熊谷敬子さんからの要請で実現したものである。熊谷さんの朗読で小林が手話舞をすると言うもので、小林にとつては初めての経験である。

東日本大震災で、気仙沼で実際に体験したと言ふ人の不思議な話しを、熊谷さんが書き下ろした「かがり舟」という物語を、小生が朗読舞に脚色した朗読舞劇である。札幌の表現者の方達との共同製作のような形である。私としては、小林の舞表現を初めて客観的にみて指導する事になるが、昔のうるさい演出家にならぬようにと思つているが、はてさてどうなるのか。

六月十四、十五日は、ギター文化館での定期公演。この公演では北海道の演目をそのまま、熊谷さんの朗読で小林の手話舞を行う。その他六月公演では、久しぶりに万葉集の手話舞を行う予定である。確定していないが、六月公演では北海道のギタリストが音楽を担当してくれることになるかも知れない。少しづつ色々なアーティストとのコラボレーションが実現して行くことを願つてやまない。

また九月には、会報ふるさと風の百号記念イベントがもたれるので、そのときに小林には何かを舞ってもらおうかなと思つているが、これはまだ何も決まっていない。

昨年の東京公演で、ヨネヤママコさんをはじめ、色々なスタッフとの交流もあり、小林の表現も一皮むけてきたように思う。一層のスケール感を持って、小林ならではの表現を確立してもらいたいと願っている。

新しい小林幸枝の手話舞表現に、ぜひご期待ください。

《一寸一言・もう一言》

||一寸一言||

戦場のビジネス

打田昇三

ヨーロッパ中世史を研究されている先生のお説によると、格好良く戦場に赴く騎士たちは厚い鉄板で出来た甲冑(よろいかぶと)を身に着けており下着まで頑丈にしていたから重い。戦場で敵に出会うと、先ず馬が息も絶え絶えに挨拶を交わし騎士同志はすれ違いざまに槍で突きを入れる。

槍が鎧の隙間に刺さらなくても当たれば落馬するし突いたほうもバランスを崩せば落ちる。地上で早く立ち直ったほうが勝ちで、勝者は転がる敵に近づき冑に付いている窓を開けて「示談にするか?」と聞く。「嫌だ!」と言えば突き刺してくれるが、大概の場合は示談が成立して値段の交渉に入り、談合が成立すれば敵に起こして貰い、後は代金の振込先を聞いて一騎打ちが終わる。

欧米社会でビジネス(契約)が重視されるのは、そういう伝統に基づくらしいが、日本の場合は名誉とか武勲などに拘るし、美意識が強いから武装も強度より見た目を大切にすることで鉄で固めたり

はしない。何より山国は坂が多いから乗り手が重いと貴重な馬が持たないのである。双方名乗り合いで敵の首を取るのを目標にしていた。

どちらが良いか!比べるような問題では無いが鉄砲など飛び道具の出現で、合戦も人命軽視大量殺戮の場になってしまったようである。

ボケ促進社会

菅原茂美

こんな便利過ぎる社会は、「ボケ」の大量生産に繋がる。体も脳も使わず、なんでも機械が処理。これでは脳細胞が自動的に縮小するだけ。私も簡単に受け入れている一つがJRのSuica。切符買うのに並ぶ必要なし。私鉄乗り継ぎも料金も気にせずスイスイと通過。高速道のETCも同じ事。人件費が省かれるので料金は割安。色々な公共料金なども自動振り替えて、働いて収入を得、吟味の上、計画的に支出する観念が薄らぐ。

最も心配なのはケイタイ&スマホ。すっかり言葉で意思を伝えたり、手紙で文字を書く習慣が全く廃れる。一億総白痴化の原動力。それが犯罪にも悪用され、振り込め詐欺やら交際関係で、財産や命を奪われたりしている。文明衰退の前兆か? それから、私自身もはまっているが、パソコンという便利過ぎるオモチャ。昔、辞書を引き引き文字を書いていたが、パソコンは漢字の羅列からクリックするだけ。とても毎月原稿用紙に手書きで文章は書けない。漢字は読めるが、書けなくなつた。更に図書館で勉強しなくとも、インターネット検索で何でも教えてくれる。百科事典も内蔵されており、音声・動画付きで、諸々を勉強でき

る。昔、イミダスや理科年表で統計数字や、物理・

化学の国際単位など引き出していたが、今はマウスをクリックするだけ。そして私は今、「囲碁ソフト」4段と闘っている。ほぼ互角。しかし、大会に出るとあがつたり緊張などで、なかなか実力発揮ができない。冷徹な機械と付き合っていると、人間の機微な心理が読めずボケが進行する。ボケ防止のつもりは、パソコンは、ボケ促進機械か?

||もう一言||

ウクライナに学ぶ

打田昇三

旧ソ連の影響が大きい国が民主化をしようとするのは難しい。一九九一年に独立したウクライナもルーブルを止められたりして苦しんだ挙句、二〇〇四年の「オレンジ革命」で何とかEU寄りになり是から発展:という時にまた、親露派大統領の出現と反発で騒動が起きている。

世界史に初めて「ロシア」が登場したのがウクライナの首都キエフであり、西暦四百年代に「キ1、シチェーク、ホリフ」の三兄弟が町を建設したのが始まりと伝えられ、ドニエプル河畔に弓と槍を持った三兄弟の像が建てられている。大河の中流域に位置するキエフは古代からギリシア人やノルマン人などが交易の中心地としていたのである。異民族同士が円滑に交流していたのに一國になると争いが起きる:不思議ではあるが、根底に権力が絡むと人間も野獣に変わる。最初から野獣ならば退治のしようもあるとは思うのだが。

キエフはモスクワから空路一時間ほどの近さであるからロシアの影響を受け易い国であろうけれど

ども、プーチン君に怒られる覚悟で言えば「ロシア」の語源はスエーデンから移住したノルマン系ルズ族と言われるから、ウクライナの方がロシアより格が上の筈である。政治家も自信を持って貰いたい。尤も日本のように自信の固まりのような政治家ばかりでも国民は不安になるから程々に…

陰謀史観の虜？

菅原茂美

私は喜寿を過ぎた。余命はそう長くはなからう。焦っているわけではないが、人生の終末は、いささかなりとも悟りを開き、良寛のように円満に過ぎたいもの。それが、世界を多少は見て歩き、又、日頃のメディア報道によると、世界の至る所で争いが絶えない。何のために人類は大腦をこんなにも膨らまして、醜い争いを防げないのか？ これまで腹立ち紛れに、ペンで吼えまくってきた。

私は「人生」を、細胞レベルで考えようとかかけている。文学者のロマンチックな物言いは、美しくはあるが、生物学的に人間の真髄を究めたものとは思えない。思想は神経細胞の中の生化学反応の所産である。生きた細胞でなければ精神は生み出せない。生命誕生以来遺伝子は、他を排しても己だけは生き残ろうとする利己性で、全てを支配している。それが生き物の根本姿勢だ。

そうは言っても、偏見といわれるかもしれないが、西欧人の利己的な個人主義の強烈さには嫌気を感じる。コロナブスの米大陸発見当時、南北米大陸に先住民は9000万人いたが、白人共は、何とその90%を殺害し、残りを辺境地に押し込め蹂躪した。財宝は盗み放題。マヤ文明遺跡を訪ね、

白人共の罪をしみじみ感じる。豪州のアボリジニ対策。アイヌを苛めた大和朝廷みな同じ。

幕末期アメリカ捕鯨線500艘が日本近海で鯨を取り放題。クジラを絶滅危惧種に追いやった日本人なのに今、シーシェパードなど日本の調査捕鯨を体当たりで妨害している。原水爆をタンと貯め込んで、世界の警察とはチャンチャラおかしい。こんな見方は、陰謀史観の虜なのであるか？

今年の桜は大幅に遅れそうだという。

三月寒波は何処まで続くのか心配である。

待ちに待った啓蟄だと地上に出てきた虫達もこの寒さでまだすぐに巣穴に潜りこんでしまっただろう。年令を積み上げる度、暑さ寒さの大きいのは体にもこたえる。

今年の大雪で、我が家の庭の沈丁花が押し潰されて、夜の酒場の化粧の香を楽しむことが出来そうにもない。

酒場にはほとんど縁のなくなった身ではあるが、夜気に漂ってくる香に、通り過ぎた女性を思つのも楽しみの一つであったのだが。

《9》

アンソング・書籍・書籍を原料料理のお店です。

(ギター文化館通り)

看板娘(大)「つらら」ちゃん

皆さんをお迎えいたします。

03-6456-0000

【特別企画】

私本『平家物語』

打田昇三

巻一 (1)

- ・ 祇園精舎のこと
- ・ 殿上の闇討ちのこと
- ・ 鱸のこと

祇園精舎(ぎおんしょうじや)のこと

平家物語は次の様な書き出しで始まっている。――祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり。沙羅雙樹(さらじゆ)の花の色、盛者必衰の理(ことわり)をあらわす―祇園精舎で撞かれた鐘の音は人々の耳に「諸行無常」と聞こえた―というのだが、祇園精舎で無くてもお寺の鐘が景気良きは聞こえない。これは「平家の滅亡」を暗示する布石のような文句なのである。祇園精舎と言うのは、過酷な修行を脱しブツダガヤで悟りを開いた釈迦が諸国行脚を終えて、初めて仏教教団を組織し本格的な宗教活動を開始した場所である。

現代でも首都のデリーから列車とバスで何時間も掛けないと行けない、ネパールに近いインド北部にバルランプールと言う町があり、その郊外シユラバステイに祇園精舎の遺跡が現存している。付近一帯は「サヘト遺跡公園」として保存されており、最盛期には仏塔、僧院、釈迦の住居、説法所、客殿などが立ち並ぶ壮大な施設であったことが偲ばれて、それらの仏教施設が残っている。この土地は、釈迦時代に近辺を支配していたコーサラ国の皇子が所有していた森林であったが、大富豪のスタダタが釈迦

に「雨安居（うあんご）長い雨期に過す道場」を寄進する為に購入したのが始まりとされる。強欲な皇子は「土地が欲しければ金貨を敷き詰めた分だけ売ろう」と言った。何もない僻地の土地で法外な値段だがスダツタは言われたとおり金貨を敷いて必要な用地を確保し、祇園精舎を建てて釈迦に贈ったという。広大な土地であるから、スダツタは金貨をどれほど持っていたのか、庶民はそれが気になる。

沙羅はインド原産の常緑高木「ナツツバキ」のことでとされているが、沙羅雙樹（さらしゅうじゆ）は二株が一本になって育った沙羅の木のことであるらしい。釈迦が入滅した際に、その聖地に多くの沙羅を植えたのだが、東西南北の四隅に植えた沙羅だけは雙樹となっていた。苗木をくつつけて植えれば何処でも雙樹になるような気もするが、沙羅の花は「高遠」を表すと言われる。その花さえも盛りを過ぎれば、萎（しお）れて落ちて永遠では無い。なお、無常感からすれば「生者必滅」とすべきところを「盛者必滅」と表現している点について、平家物語が単に宗教的説話では無く本質は歴史物語であることも指摘されている。

説教じみた話になるが平家物語は「人間社会でも奢（おご）り高ぶる者の時代は長く続かない。それは春の夜の夢のように儚（はかな）く、勢威を誇っていた者でも遂には滅び去ってしまうのである。これを例えれば正に風の前の塵（ちり）に同じであって、瞬間に消えてゆくのである」として、先ず遠く異国に有った例を挙げているが、平家物語が書かれた時代の日本では異国と言える国は古代中国しか知らないから、挙げられた例が中国の話になっているのである。

先ず「秦（しん）？紀元前二〇六年）の趙高（ちやうこ）

（し）は始皇帝に仕えた宦官（かんがんに去勢された家臣）であったが、皇帝から皇太子に宛てた遺言書を預かったのを悪用して遺言を偽造し、別な人物を王にした。一時的には権力を握ったけれども、やがて自分も其の「偽王」に殺されてしまった。

「漢（漢・紀元前二〇二年）西暦八年の王莽（おうもう）は皇后の親族という立場を悪用して王を殺害し、自分で「新の国（西暦八年）二十三年」を建てたけれども、過酷な政治を布いた為に人民の不平が高まり、反乱で滅びた。

「梁（りやう）西暦五二五）の周伊（こと侯景）は北魏の武將で有りながら梁に帰属して祖国を滅亡させた反逆者である。南京を攻略して国を建てたが、程なく戦いに敗れて死んだ。（侯景の乱の首謀者となった

「唐（西暦六一八）九〇七）の禄山（は、有名な楊貴妃と玄宗皇帝の悲話を生ませた張本人、つまり反乱首謀者の「安禄山」である。唐の外交官に仕える使用人から身を起こし皇帝に取り入って高官の地位を得た。やがて背いて帝位を奪い「大燕（だいえん）」国」を建てたけれども、後継者問題で息子に殺害された。なお禄山はイラン系キヤラバン民族のソグド人とされる。

是らの例は何れも全て自分の主君や王に背いて権力を奪った人物であるが、そうかと言って良い政治をした訳では無く自分たちの栄耀栄華の為だけに政治を行ったのである。他人の諫め（いさめ）も聞かず、世の中が乱れることも覚らずに国民の苦しみにも耳を貸そうとはしなかった。その為に長く権力を保つことが出来ず滅びた連中である。

これを日本の国内に当てはめて見れば先ず承平年間に起こった平将門の反乱に始まり、天慶年間に西国で海賊として暴れた藤原純友、康和年間に地方で

政府に背いた源義親、そして平治の乱の首謀者である藤原信頼がいる。俗説では藤原純友が平将門と共に謀したように言われるが関係は無い。最初は役人として海賊退治をしていたけれども海賊の方が儲かるので転職しただけである。源義親は八幡太郎義家の次男である。地方国司在任中に都へ送る税（物納）の宛先を自分の屋敷にして免職になり、隠岐島に流されたけれども脱走に成功して出雲国などの国府を襲った。これを征伐したのが平正盛（清盛の祖父）である。藤原信頼の場合は、後白河上皇に目を掛けられたのを良いことに官職への更なる野望を抱いてライバルの藤原信西を蹴落とそうと、源義朝と組んで「平治の乱」を起こしたけれども負けたのである。なお現代では平将門事件などが、腐敗した中央政権への抵抗と見られているけれども、平家物語が書かれた時代には権力に逆らった者は全て逆賊にされてしまったのである。

平治の乱の三年前には似たような原因から保元の乱が起きており、平清盛が出世をする切っ掛けを掴んだのであるが、この首謀者が崇徳上皇なので平家物語の作者も遠慮して書かなかったと思われる。これだと「諸行無常」にも差別があることになる。それは兎も角、平家物語の主張では名前を挙げられた連中は思い上がった傲慢さ、邪悪な心など、謀反を越した動機がそれぞれに違っていたかも知れないが結局は権力に対する欲望から身を滅ぼしたことになる。そして間近くは六波羅の入道前太政大臣平清盛公（ろくはらのにゅうどうさきのだじょうだいにたいらのきよもり）と申した方の栄華の有り様は、伝え聞く話が誠に壮大であり、また没落の様子があまりにも極端であるため、それを言葉では言い尽せない程である。単純に言えば「罰が当たった」のであるが、そ

れは言えない。

平清盛は出家して清盛入道と号したが、この人の先祖は桓武天皇の第五皇子、一品式部卿(いっぽんしきぶのきょう) 葛原親王である。「一品」は皇族に与えられる四階級(一品から四品まで)身分の最高位であり「式部卿」とは現在の文部科学大臣、人事院総裁、内閣法制局長官に当るが、勿論、名譽職のようなものでもあったろう。清盛は、葛原親王から九代の後胤になる讃岐守(香川県知事) 正盛の孫で、刑部卿(きょうぶぎょう) 法務大臣を務めた忠盛朝臣の嫡男になる。(美父は白河法皇とする説があることは既に述べた) なお「朝臣(あそん)」は姓を賜った者の尊称である。

前文でも述べたが、葛原親王の子である高見王は官職も官位も与えられずに亡くなった。その当時は皇族も就職難で葛原親王は息子たちの民営化も中々実現して貰えなかったけれども高見王の子である高望王(たかもちのおきみ)の時に、ようやく「平」の姓を貰って「上総介(かずさのすけ) 前文で紹介」などに任命され、皇族を離れ臣下になって都から関東に来た。

その長男が鎮守府將軍(東北地方の軍司令官)を命じられた平良望で後に平国香と名を改めた。国香から正盛に至るまでの六代は、諸国の国司などに任命される公務員であつても地方回りが主で当時のエリートコースどころか未だ宮殿に出仕することさえも許されない身分であつた。

国司が現地に赴任する場合は宮中に参内して天皇に「罷申(まかりもうし)」という挨拶をするのであるが、ややこしいことに昇殿には別に資格が要るので、宮中の備え付け名簿に登録されていないと上がれないのである。登録も自分でするのではなく、指定されるのである。何しろ藤原一族の時代であるから、

武士階層の平氏は国司には任命されても名簿に名前が載せて貰えない。平家物語原本に「殿上の仙籍をば未だ許されず」とあるのは其のことである。(「殿上の闇討ち」で記述)

大まかに言えば、天皇から臣籍に下つた者には「源」の姓が与えられ、親王から出た者は「平」の姓で呼ばれて民営化されるのだが、何しろ皇族の数が多く、源氏は嗟峨、仁明、文徳、清和など何十も流派があり、平氏も桓武系以外に三流があるから、落下傘部隊のように降下すれば良いと言うものでもない。さらに藤原一族の天下では皇族から臣家になって何代も過ぎると源氏も平家も全く名前の意味を成さず、公家たちに蔑まれ使役される立場になっていたのである。

殿上の闇討ちのこと

平氏はその様な身分なのだが金持ちであつた。地方回りが多かったからである。この仕事は現代の天下り法人などの長と同じで、職務に旨味があつたけれども藤原一族は都を離れると出世に影響するので是を嫌つたから源氏・平氏などの中級官僚が任命されるが多かつた。危険な仕事は尚更である。国司などは一国の主であるから都に税さえ送つていれば後は自分の裁量次第で懐(ふと)こも暖かくなる。

豊南国の国司を何年か勤めれば笑いが止まらないほど裕福になる。特に平家の場合には他の者が嫌がる海賊征伐などもこなしており西国に勢力を広げていて宗の国(中国)と貿易をしていた。この儲けは大きく、さらに平氏は早くから伊勢の国に入り込んで勝手に開発を進めていた。伊勢は神様の領域であるから他

の豪族は手を付けない分野になる。そうして溜めた財産は偉い人の関心を買う為に投資するのである。

其の頃に備前守(岡山南部の国司)であつた平忠盛は、情報網を掴んで鳥羽上皇(第七十四代天皇、五歳で即位、祖父の白河天皇により二十歳で崇徳天皇に譲位させられた)が大きな寺院を建立したが知っていることを知つた。皇族も貴族も暇で有り、することも限られていたから、ある年齢に達すると自分の死後に極楽往生が出来るかどうかを案じていた。その手段として有効と考えられていたのが「寺院の建立」である。そうは言つても寺を建てるとなれば膨大な経費が必要になるし、上皇でも懐具合は下降気味であるから、寺院建立などは夢のまた夢なのである。

平忠盛は財力に物を言わせて、都の人々があれよあれよと言う間に「得長寿院(とくちようじゅいん)」という大寺院を建立し、さらに後の世に「通し矢」で有名になる「三十三間堂」までオマケに付けて、それを鳥羽上皇の名で仏教界に寄進したのである。

贈与税がどうなつたかは知らない。そこに納めた仏像は一千一体も有り、中央に置かれた観音像が高さが一丈六尺、左右に五百ずつ等身大の観音像が並べられた。天承二年(一一三二)三月十三日には鳥羽上皇の名で盛大な供養が行われた。しかし、このときの寺は火災に遭つたようであり、後に後白河法皇が発願して平清盛が蓮華王院として併合寄進したものが天台宗に属し東山区に現存するそうである。

忠盛の奉仕と言いか見え透いた忠誠心でも鳥羽上皇が喜ばない筈がないので、御褒美として何処か空いている(国主に欠員の出来た)国を貰えることになつた。これで平家もモトが取れる。メダシメダシ。当時、但馬の国(京都府北部)が空いていたので其処を貰つたと平家物語には書いてあるが、近代の考証で

は但馬国は空いていなくて平忠盛は備前守のままであつたらしい。それでも損はしなかつたことになる。

鳥羽上皇は、平忠盛の行動に感心して(誰でも喜ぶが)内の昇殿をゆるした。「祇園精舎のこと」で触れた昇殿名簿に登録してくれたのである。忠盛は三十六歳にして初めて「殿上の仙籍」を許された。現代の感覚で言えばツマラナイことだがこの「殿上の仙籍」というのが実にややこしい。

長くなるけれども、時代を知る為に述べておくと先ず天皇の居場所を中心として、四方に現代の官庁街が置かれていた。これが「大内裏(だいたいり)」である。この中には多分、千人近い公務員が勤務していたと思われる。その中で主として藤原一族の一部が、公務員の身分に更に「殿上人(でんじょうびと)」という地位を勝手に設けて出入りの差別をしていた。

大内裏の中央部や東部に東西約一七〇メートル、南北約二一〇メートルの一角がある。此の地域は「内裏(だいり)」と呼ばれていた。内裏への出入りは建春門、建禮門などの門からで、当然だが武士が警護していた。源氏や平家の一族も、曾てはそういう警護の仕事に就かされていたのであるから、公家たちには身分違いの者と思われる。

内裏内部には「殿(でん)」とか「坊」「舎」「所」などという施設が三十ぐらい在って、中央部の西寄りに後涼殿と繋がって「清涼殿」がある。此処は天皇が常に居る場所であるが、その南の端に昇ることが出来るのは原則として「公卿(くぎょう)」と呼ばれた三位以上の者で大臣、納言、参議などの役職にあるもの、そして官位が五位以上の者で、さらに選抜された者でなければならず、これを「殿上人(でんじょうびと)」と呼んだ。選抜の基準は無い、と言うよりも、天皇・上皇の思い付きで資格が与えられた。位

階が三位以上でも参議以上の職に無いとダメであり、有効期間は天皇一代限りである。官位が国司などより高くても先に述べた名簿に洩れては駄目なのである。

「殿上人」に対して上がる承認が貰えない者は「地下人(じげにん)」と蔑称されていた。桓武平氏も最初に皇籍を離れた高棟流は公家仲間に入れて貰ったから一応は「堂上平氏」と呼ばれており高望流のほうは降下の際に着地したのが常陸国であつたから「地下平氏」と呼ばれていた。地上に居ても地下人だと地下鉄の運転手やデパートの食品売り場に勤務する店員などは行き場が無いけれども、これは内裏に勤務する者(當時の公務員)に与えられた差別用語であるから、真面目に働いていた一般庶民は被害に遭うことはない。

平家物語に戻って、昨日まで「地下人、然も武士あがりの国司」として中央官僚どもに見下されていた平忠盛がいきなり殿上人になった。狭い丁見の公家どもが暖かくも冷たくも平穩に迎えてくれるはずが無い。鳥羽上皇の人事を嫌い、是を逆恨みをした。妬み(ねたみ)と軽蔑(けいべつ)で憤慨したのである。彼らにとつては下足番ぐらいにしか考えていなかった武士が自分たちと肩を並べることには我慢が出来なかつたのであろうけれども、上皇が決めたことに天皇の取り巻きが従わない……というのは統治の欠陥である。

此処で話の筋からは逸れるけれども、当時の天皇家の事情を述べて置かないと物語全体が不鮮明になる恐れがあるので概略を紹介しておく。平家物語・殿上の闇討が予定?された頃の天皇は第七十五代の崇徳(すく)天皇で宮殿から中学校に通っていた。父親は先代の鳥羽天皇(鳥羽上皇)であるが、此の時

は未だ三十前であるから引退するには早すぎる。本人が希望した訳ではなく祖父の白河天皇(法皇)に、成人式が済んだ途端に引き摺り下ろされたのである。実は崇徳天皇が自分の子では無く、白河天皇の子ではないか?という疑問を持っていたのだが、息子(実は祖父の子)に皇位を奪われたことで、年来の疑惑は事実であると確信したのである。

崇徳天皇は、石岡でも金刀比羅宮に祀られているから悪くは言えないが、母親は藤原璋子(しょうし)と言う超美人(権大納言・藤原公美の娘)であり待賢門院と呼ばれた。鳥羽天皇の中宮なのだが、これは白河法皇が強引に押し付けたものである。理由は知らないが白河天皇は此の美少女を子供のときから傍に置いて育てたそうで、大人になってからも離さなかつた。表現は悪いが仕込みが終つてから払下げたようなもので、鳥羽天皇が自分の息子と思わなかつた気持ちも分かる。

白河法皇の死後、呪縛を解かれたように鳥羽上皇は院政を開始したから、崇徳天皇の朝廷と鳥羽上皇の院政と、良く言えば二本立て、普通に考えれば無駄な政治が行われていたのである。多分、政治の実権は鳥羽上皇に握られ、少年天皇の許では儀礼的なことが主に行われていたのであろう。平忠盛はそれを見越して鳥羽上皇に寺院を寄贈したのである。そして資格として天皇の許に昇殿を許されることになつた。

院政とは、天皇が居るのに先代または先先代の上皇又は法皇が実質的に政治を行うことで、是ほど出鱈目な統治は無いのだが、日本では白河上皇(法皇)が始めてから幼い天皇の即位が続いた時代に堂々と行われていた。庶民の感覚だと隠居したジジイは黙って居眠りでもしていれば良いのだが、権力が絡む

ことなのでややこしくなる。歴史的には持統天皇、元明天皇、元正天皇、聖武天皇、孝謙天皇、嵯峨天皇、宇多天皇などが院政のような形はとっていたが、国政は天皇が行ってきたから問題は無かった。白河天皇以後は政治的な意図から讓位が行われ実権は先帝が握っている形であったから「船頭多くして船山に登る」：国政が行われて朝廷が混乱し、それに藤原一族の勢力争いが加わって「保元の乱」「平治の乱」による皇族の内紛、藤原一族の権力争いに発展する。

平家の興隆と言うか、平清盛が天下を握るようになった切っ掛けは「保元の乱」と「平治の乱」にある。「平家物語」は「鱸の事」で触れている。保元の乱は「保元物語」に、平治の乱は「平治物語」に書かれているので、源平両氏が「合戦屋」として商売を競ってきた中から、清盛が社長となった平興業が抜き出るチャンスが到来し、源氏組が倒産することになる経緯は両物語に託され、平家物語は頂点に立った平氏の栄華と没落がテーマになるのである。

鳥羽上皇は崇徳天皇の御所とは別に院庁を置き必要な公家や警護の武士を置いていた。平忠盛は当然ながら院庁での昇殿は許されていた。それに加えて天皇の御所へも参内する資格を与えてくれたのである。これはどう考えても天皇を取り巻く公家たちの納得できる話では無いのである。

天皇の許に居る不満分子は、同じ年の十一月二十三日に行われる宮中の行事「五節豊明の節会」(せちとよのあかりのせちえ)の夜に忠盛を闇討ち(暗殺)しようとして企んだ。この行事も天皇が新米を試食する新嘗祭(にいあめさき)の後に連夜で行われる宴会であり、表向きは公家たちの舞を天皇がご覧になるというバカバカしい行事であるから、どうでも良いのだが無

礼講に近い宴会であるから座も乱れる。そこを狙って平忠盛を暗殺する計画であった。この暗殺計画については、場所が場所だけに「史実ではない」とする説もあるようだが、似た様な事件の記録が残るので「暗殺の陰謀はあった」と解釈したほうが良いらしい。権力の中枢である宮殿で殺人計画が簡単に決まる：何とも野蛮で乱れた社会だが、それが平安末期の日本の中核の実態であった。恐ろしや：もともと、九百年近く経った現代でも、暗殺計画こそ無名ものの権力の奪い合いが国政の最大課題であるから昔の人たちを悪くは言えない。

既に述べたように、当時の天皇家は白河上皇がボスで堀河、鳥羽、崇徳、近衛の各天皇が幼稚園又は小学校在学中に次々と即位した。白河法皇の死後は鳥羽上皇が皇室の頂点に立ち天皇を超えて政治に介入する。その感情的対立が藤原一族の対立を含んで戦乱に発展することになる。呆れ返るけれどもそれが切っ掛けとなって武士の時代が到来するのであるから、これも一概に「悪」とは言えないのである。か：実に立派な時代であった？

さて「暗殺計画」と言っても動機が単純で内容が幼稚で手段が杜撰(ずさん)なものであるから直ぐに漏れて、秘密の細部は犯人よりも詳しく平忠盛の知るところとなった。冗談では無いようなので何とか対応しなければならぬ。忠盛は呆れながらも考えた。「平氏は宮殿に居る馬鹿公家のように文官では無い。武士の家に生まれて闇討ちなどされては家の恥、身の恥であるが、そうかと言って当日に欠席するのでも腹立たしい。武士の社会では：自分の身を全うして最後まで主君に仕えるのが忠臣である：と言われているから此の場はそれなりに対応しなければならぬまい：」そこで、当日はあれこれと周到に準備をし

ながら暗殺計画など全く知らぬ振りや宮中へ出掛け

た。その夜は長めの短刀を持参して、それをだらしく着た衣装の腰に差し、公家どもから良く見えるようにして、わざと篝火(かがりび)の近くに寄って暗闇に向かい、短刀を自分の髪に当てて切れ味を確かめるような素振りをしてみせた。これが陰から忠盛の様子を窺っていた公家ども目の目には氷の刃(やいば)のように映り、何とも恐ろしくて、とても闇討ちなど出来そうもなくなった。

一方で忠盛の郎党(軍事的な家臣)が、武士の制服である狩衣(かりぎぬ)姿で派手な色の腹巻を身に着け、櫛袋(つかぶくろ)を巻いた俣ではあるが太刀をしつかりと身体に密着させ、清涼殿に近い板敷の前庭近くには畏まっているのが見つかった。(櫛袋については原本により弓の弦袋とするものがある)此の人物は、左兵衛尉家貞(さびょうえのしょういへさだ)と言った。平忠盛の父親・正盛の頃は平氏一族であった平木工助(：もくのすけ)工事監督部署の中級役人、名目上であろう。貞光の孫で、父親は進三郎大夫家房(しんのさぶろうだゆういへふさ)である。此の一族は現在では忠盛に仕える忠臣である。

それを見とがめたのは天皇側近の頭左中弁師俊であった。左中弁は太政官の判官職で天皇が下す勅書を書いたりする高官であり「頭」はその首席であるから自分で確かめたりはしない。平家物語には「六位をもつて言わせければ：」とあるが、これは藏人(くらんど)という天皇の側近に命じて確認をさせたのである。藏人は嵯峨天皇時代に創設された秘書官で地位は高くないが機密事項を扱うから他の公家とは違う。暗殺計画には関与していない。この時に怪しい人物の排除を命じられた藏人が検非違使(検察官)

を兼ねる「平時信」である。つまり後に平清盛の妻となる時子の父親になる。既に述べたように同じ桓武平氏でも此の系統は最初から公家の中に入っている。それでも同じ桓武平氏の流れを組むから、どちらかと言えば平忠盛には好意的である。

現場に行かされた六位こと平時信は「うつぼ柱の内側、鈴の綱の辺りに居る布衣の者(ほいもの)武士は何者であるか。其処にいるのは違法行為である。速やかに出て参れ！」と言いなが怪しい人物の傍に寄って行った。この場合の「うつぼ柱」とは階段の側にある雨樋を隠す柱であり「鈴の綱」は蔵人が小舎人(ことねり)という下役を呼ぶ鈴である。この呼び掛けに対して、相手が平時信であると知った左兵衛尉家貞は、恐縮しながら丁寧に、しかし頑固に応えた。

「私にとって代々の主君である備前守殿(金忠盛)のことが、今夜は何者かに闇討ちをされると聞いたので家臣として確かめる(主君を護る)為に此処にいるのです。怪しい者では有りませんが、私も目的が有って居るのでから絶対に此処を動くことは出来ません……」

神妙な答えだが、命令は頑固に拒否したのである。通常ならば検非違使の権力にかけても退去させるのであろうけれども平時信も大まかな事情は察したから、職務上は厳重注意をする振りをして黙認してくれた。この騒動は殿上に居る暗殺実行犯にも知れたから深く詮索されると都合が悪い。あれやこれやで其の晩の「闇討ち」は中止になった。

そうは言っても殿上人と言う野蛮人の苛めが無くなった訳ではないから「五節豊明の節会」のメインである舞いの席では、平忠盛が舞った際に、わざと拍子を変えて「……伊勢平氏(瓶子・へいし)上が膨らんだ

酒用の壺は素瓶(すがめ)なりけり……と囃し立てた。

伊勢国の産物には高級では無い素瓶が有ったので、それを平忠盛が眇(すがめ)斜視(かたがみ)であることに掛けて侮辱したのである。此の人(忠盛)は恐れ多いが桓武天皇の末裔であるけれども、臣籍に降ってからは地方住まいも多く、都暮らしも板に付かず、とり分けて伊勢の国に長く住みついていたので、その物産に事よせて「伊勢平氏」と見下されていた。

忠盛は、殿中のことと我慢をしていたが、途中から退席した。其の際に会場である内裏・紫宸殿の後にある控室で、人目に付くように自分が差してきた太刀を主殿司(このもつかさ)宮中で灯火の管理などを行う女官に預けてから外に出た。主殿司は身分こそ低いが天皇・皇后に近侍するため公家なども気安くは近づけない。預け先としては最も安全なのである。殿上から退出してくると頑張っていた左兵衛尉家貞が心配顔で駆け寄って来て「如何でしたか何事かございましたか？」と尋ねた。言いたいことは山程有るのだが、それを言えば、家貞はきつと天皇の居る殿上までも駆け登って公家共を斬りかねない勢いであったから忠盛はあえて「別に心配することも無かった……」と答え、その場は済ませたのである。

豊明の節会など五節の行事では、舞手の衣装やら舞いの様を身近な道具などに例えて、優雅風流な趣味のことを話題として歌を詠み舞いを舞うのが本来なのであるが、墮落した公家たちは、他人の欠点を口にして軽蔑し馬鹿騒ぎをするようになってしまった。それが天皇の前で公式行事として行われた。以前に有ったことだが、九州防衛の責任者で正三位の太宰権帥季仲卿(たさいごんのそつすえなきよ)と言う肌の色が黒い人物が蔵人頭(くらうどのとう)天皇側近の長で有った頃に舞いを披露したところ「何と黒き頭

かな。誰が黒漆を塗ったのであろう」などと囃し立てた。また平清盛の後に太政大臣を務めた藤原忠雅公は、十歳で父親に死なれて孤児となったのだが、これを中御門中納言藤原家成が未だ播磨守で有った頃に婿として迎え大切にしていた。是を知った連中が「播磨米は木賊草(とくき)木材の艶出しに使う)か、棕の葉(これも家具などの艶出し)か、人の綺羅を研く(みがくは)」と囃し立てた。播磨の米は玄米で納められたので精白することに掛けたのあろうけれども悪意である。昔は、そういうことも有ったが特に事件にはならなかった。しかし当世は殺伐とした世の中であるから(平忠盛暗殺未遂事件の様な事もあったので)無事に済むかどうか不安である。

心配したとおり、五節豊明の行事が終わってから公卿(くぎょう)と呼ばれる大臣、納言職、参議などの高官と殿上人(先に述べた昇殿を許された者)たち、つまり平忠盛の昇殿を快く思わない連中が、暗殺に失敗した悔しさもあって崇徳天皇の許に平忠盛の殿中に於ける行動を訴え出たのである。その言い分は、自分たちの暗殺計画などはおくびにも出さず次のようなものであった。

「武器を持って殿上の宴に列し、武装した供を従えて宮中に入ることが出来るのは法令に定められた者と、天皇の特命により許され者だけである。それなのに平忠盛は五節豊明の宴に武装した家臣を庭先に待機させ、自分でも腰に太刀を差して節会の席に参加していた。このことは前代未聞の狼藉である。違反が幾つも重なっているから罪は逃れられない。速やかに昇殿名簿から削り、現職の官を罷免すべきである……」

この話は当然ながら鳥羽上皇の耳にも入った。驚いた上皇は、天皇が忠盛を喚問する前に急ぎ呼び寄

せて事情を尋ねられた。忠盛は次のようにお答えをしたのである。

「先ず、郎党が小庭に待機していたことは私の知らぬことでございます。しかし殿上の方々が私を暗殺すると言うような謀略のあることは知れ渡っておりましたから、万一の場合には私を助けようと内密で待機していたでしょう。もし、これが罪に問われるのであれば致し方ありません。本人の身柄を差し出しましょうか？また、刀のことは主殿司に預けてありますから、これをご覧戴いてから罪の有無を御判断頂きたく思います…」

鳥羽上皇は「成る程！忠盛の言うことは尤もである」とお考えになり、早速、主殿司に命じて問題の刀を取り寄せられた。上皇がご覧になると（誰が見ても同じであるが）太刀の上部は鞘に見せて黒く塗ってあり、刃の部分は銀箔で白刃に見せた木刀であった。つまりは、当面の急（暗殺計画）を避けるために、見掛けは太刀を持っているように見せかけていても、後日に問題となることを承知して木刀を以て相手を牽制したのである。

鳥羽上皇は忠盛の行動の用意周到なことに感服した。誠に見事である。弓矢の道に携わる（武門で奉仕する）者の謀（はかりごと）は、このように有るべきことが望まれると感じられた。そこで「太刀を殿上に持ち込んだ事実が無いので忠盛に落ち度は無く、また家臣が庭先に待機していたのは武士の郎党として習慣であろうから忠盛の罪にはならない…」と裁定を下されたのである。上皇は忠盛の行動をお褒めになり、忠盛は武士として面目を施したのである。勿論、忠盛が崇徳天皇から罪に問われることはなかった。

なお、「五節豊明の節会」は原本により十一月と十二月とに分かれるが、十一月が正しいようなので、

それに従った。

鱸（すずき）のこと

やがて平忠盛の息子たちは諸衛の佐（すけ）に任官された。（格段の出世をした）諸衛とは内裏を警護する近衛府、兵衛門、衛門府のことで、左右に在ったから六衛府になる。各衛府の長官は近衛府が大将で、衛門府と兵衛府は「督（かみ）」がトップになる。従四位の官であり中納言が兼帯することが多かったようである。平忠盛の息子たちが任官した「諸衛の佐」は次官であり鎮守府將軍と同じく従五位上の官になる。源平盛衰記には長男の清盛以下、七男の忠度までが揃って「諸衛の佐」になったように書いてあるが、実際には清盛と忠度が左兵衛佐になり頼盛が右兵衛佐になったとされる。他の兄弟は相当する官職に任官したのであろう。そのように忠盛の子らは全て「殿上の闇討」で紹介した昇殿を許される身分になったけれども忠盛の頃とは違って既に平氏の力が増ってきているから公家たちも以前のように無視したり、蔑視したりすることは出来ず、今や平氏一族は堂々と公家の社会に進出を果たしたのである。

その頃に忠盛本人は未だ備前守であった。しかし頻繁に都に来ていたようで、鳥羽上皇の許にご挨拶に向いた折り、上皇が「明石浦は如何であったか？」と訊（たず）ねられた。明石の海岸は月の名所として知られて居り、特に秋の季節は月が冴え渡り、それが明石海岸の波に映えて歌にも詠まれる名所とされていたのである。上皇が外出するとなれば必要以上のお供が付くから、気安く旅にも行けない。明石の月を見たくても見られないから、備前国（岡山）から

都へ来る途中で必ず明石の浜を通過して来る平忠盛から話が聞きたくて待ち兼ねていたのである。

この場合に「それは誠に美しい光景で」などと答えれば上皇は羨ましく思うであろう：忠盛はそれを察して「有明の月も明石の浦風に浪ばかりこそよるとみえしか」と和歌をもってお答えした。

素人が単純に考えれば「いくら月の名所でも浪だけしかみえません」と素っ気なくお答えしたように思えるが、夜明けの月、明石の夜を明かし、夜に寄る浪などと掛け言葉を使った名歌だそうである。鳥羽上皇は感服されて、この歌を「金葉集」という白河上皇が大治二年（一一二七）に源俊頼に命じて編纂させた歌集に入れられた。なお源俊頼は百人一首にある「うかりける人を初瀬の山おろしはげしかれとは祈らぬものを」の作者である。

平忠盛は武骨だけでなく、此のように優雅な人物であり、都に居る時には鳥羽上皇の御殿に仕える女房を妻としていた。当時は男性貴族が複数の女性の許に通う結婚形態が普通であった。或る時に面会を終わって（夜明けに）帰る際に、忠盛は女房の部屋に扇子を忘れてきた。其の扇子には片側に「月」が描かれたものであった。遊びに来ていた他の女房が、それを見つけて「これは何処から出て来た月なのでしようか？出所が分かりませんね…」とからかった。好奇心旺盛な女房たちは、忍んで来る相手が薄々、分かっていながら、本人の口から聞きたいのである。忠盛の相手の女房は歌で答えた。「雲間よりたどりきたる月なればおぼろげにてはいはじとぞおもふ」この女性は薩摩守忠度（ただのり）の母親であるが、二人は共に風情のある相思相愛の男女であった。

そのうちに平忠盛は刑部卿（ぎょうぶきょう）訴訟裁判を行い罪人の刑罰を執行する役所の長になつて仁平三年（一

一五三 正月の十五日に亡くなった。享年五八歳である。その跡目は嫡男の平清盛が継いだ。此の人は保元元年（一一五六）七月に宇治の左大臣と呼ばれた藤原頼長が世の中を乱した際に後白河天皇の味方について勲功を顕し、当時は安芸守であったけれども播磨守に転じ程なく太宰大貳（ださいのだいに）に栄進した。

此の職は大宰府の次官であり国土防衛の責任者として近衛中将と同格の従四位を与えられる出世コースの職務である。都は離れるが任期は長く無く次の職は、それ以上になるから、国司級の官僚には羨望の職である。多分、後に平家が西国に伸びる下地は、此の時期に作られたのではないのか。なお既に述べたように「保元の乱」の首謀者は崇徳上皇なのであるが「平家物語」も遠慮して其のことを伏せたのである。

次いで平治元年（一一五九）十二月には平治の乱が起った。当時の朝廷内は、後白河上皇の近臣である藤原通憲こと信西と藤原信頼とが対立しこれに平清盛と源義朝の対立が絡んで清盛は信西に結びつき、義朝は信頼に近づいた。さらに二条天皇の即位により天皇側近の公家たちが後白河上皇の院政を嫌って天皇親政を望むようになり義朝と信頼とは天皇親政派を取り込んだ。その頃、平清盛は平氏一門を率いて熊野へ参詣に出かけた。

その留守を狙って信頼・義朝が挙兵し後白河上皇を宮殿に移し信西を斬ったが、清盛が熊野行きから駆けつけて二条天皇を六波羅の邸宅に迎え、さらに後白河上皇を他所に移してしまった為に藤原信頼・源義朝側は大義名分の実を失い逆賊の立場に立たされることになった。源義朝の軍は壊滅し、武門の榮譽は清盛に帰したのである。平家物語によれば「…

勲功一にあらざ、恩賞是（これ）重かるべし」ということになり、翌年には正三位に叙された。この地位は太政官では大納言相当で他の役職には該当するものが無い高官である。

さらに平治の乱の翌年八月には「参議」として宮中で政務に預かる身になった。禁中警護の長官や検非違使の長官（検事総長）、中納言、大納言を経て内大臣から従一位の太政大臣に登った。兵杖隨身と言つて武装した護衛兵が付けられる身分になり、人力車や牛車に乗ったままで宮中に入りする資格を与えられた。これは摂政関白（天皇の代理）と同じ特別の待遇である。

太政大臣と言うのは端的に言えば現代の内閣総理大臣であるが、抽選や談合でなれる現代の首相とは根本的に違つて、律令官制の中核であり職務は天皇の補佐であるから原則的に皇太子が任じられていた。臣下では惠美押勝（藤原仲摩）が勝手になったのが最初で、次に称徳天皇が弓削道鏡を任命したのだが藤原一族に邪魔された。平安時代になつて文徳天皇の代に藤原良房が任命されてからは藤原一族が独占していた。

此の職は「則闕の官（そつげつのかん）」と呼ばれていたのだが、その意味は「一人（天皇）を師範として四海に儀刑せり。邦（くに）を經（おさ）め、道を論じ、陰陽を燮理（やわらげおさむ）其人にあらざれば、則（すなわ）ち闕（か）けよ」天皇に代わつて統治する職であるから、適任者が居なければ欠員とせよ」と言うことである。そのような重職なので誰もが成れる訳ではないが、平清盛公は武家出身でその地位に登り日本国中を掌握したのであるから、これは傍からとかかく言うことでは無い。

ところで平家が此の様に繁盛したのは熊野権現の

ご加護に依るものであると、人々は噂をしていたのだが、その訳とはかつて平清盛公が安芸守であった頃に、本拠地の伊勢安濃津から船で熊野参詣をしたことがある。その時に一行を乗せた船に「鱸」の大魚が飛び込んだのである。熊野権現とは紀州熊野に鎮座する三所権現すなわち熊野本宮こと熊野座（います）神社、熊野新宮こと熊野速玉神社、それに那智大社こと熊野夫須美神社である。鱸という魚は幼魚から成長する度に「せいご」「ふっこ」「すずき」と呼び名が変わるので出世魚と呼ばれていた。船中にいた熊野参詣の先達（案内者）は「熊野詣での船中に出世魚が飛び込んだのは熊野権現のご加護がある証拠ですから急ぎ参詣を致しましょう」と言つた。

清盛は慌てずに「故事によれば、周の武王（戦車三百、勇士三千、兵四万五千を率いて先代の殷を滅ぼした創世期の王）の船にも白い魚が躍り込んだという。これは正しく吉事である。熊野参詣に向かう折りの本来ならば、精進潔斎をすべき時であるが、此の魚を捨てては置けぬ」と、家臣に命じて大鱸を調理させ、一門の者から家臣にまで食べさせた。そのお蔭で、平氏には吉事が続きながら龍が雲に登るように清盛も出世して太政大臣となり、子供たちも官位が上がり、桓武平氏の始祖である葛原親王から九代にして祖先を超える出世をしたのである。

※鱸の事は平家繁栄の靈験談であり原本によつては欠のものがある。参考として「保元の乱」「平治の乱」の対立関係を略記する。

保元の乱 勝者 後白河天皇、藤原忠通、源頼政、

源義朝、足利義康、

平清盛—平基盛、
平盛兼（清盛の叔父）
平信兼（盛兼の子）
藤原頼長、平家弘、
平忠正（清盛の叔父）
源為義—源為朝と兄弟

平治の乱

二条天皇親政派と後白河上皇派との対立はあったが、実際には藤原信頼が源義朝と結んで起こしたクーデターの失敗であり上皇、天皇共に平清盛に救出された。

勝者—平清盛ら

敗者—藤原信頼、源義朝ら

（平清盛と結んだ藤原信西は敵に殺害された）

編集事務局 〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

（白井啓治方）

<http://www.furusato-kaze.com/>

※四月号（第95号）は、四月五日（土）発行の予定します。

ふるさと風の会では皆様の投稿をお待ちしております。毎月二十五日が締め切りです。

投稿いただきました原稿は必ず掲載させていただきます。原稿用紙（四角字詰め）二枚程度まで。ぜひ投稿ください。

ふるさと風の会会員募集中!!

ふるさと風の会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える仲間」を募集しております。

自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさと自慢をしたいと考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

○会費は月額2,000円。（会報印刷等の諸経費）

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063

打田 昇三 0299-22-4400

兼平智恵子 0299-26-7178

伊東 弓子 0299-26-1659

ふるさと風の会 <http://www.furusato-kaze.com/>

ギター文化館

2014 CONCERT SERIES

3月21日 ARCタンゴトリオ コンサート

3月23日 大島 直 ギターリサイタル

3月30日 鈴木大介 ギターリサイタル

4月 6日 小沼ようすけ&金澤英明 JAS LIVE

5月 5日 藤井敬吾&北口功&角圭司 名器コンサート

5月24日 マリオ鈴木 ギターリサイタル

6月 1日 國松竜次 ギターリサイタル

6月 8日 高橋竹童 津軽三味線コンサート

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間431-35

Tel 0299-46-2457 Fax 0299-46-2628

工房オカリナアートJOY

母なる大地の音を自分の手で
紡ぎ出してみませんか。

あなたの家の庭の土で…、また大好きな雑木林に一掴みの土を分けてもらい、自分の風の声を「ふるさとの風景」に唄ってみませんか。オカリナの製作・オカリナ演奏に興味をお持ちの方、連絡をお待ちしています。

野口喜広 行方市浜2465

Tel 0299-55-4411